トップ対談 48

組合員・地域とともに

「希望と活力に満ちた」みやざきの農業と地域を創出します！（下）

ゲスト／栗原 俊朗（宮崎県ＪＡみやざき　代表理事組合長）

第48回ゲスト

宮崎県ＪＡみやざき　代表理事組合長
栗原 俊朗



くりはら・しゅんろう
1951年宮崎県生まれ。施設野菜と水稲を営む。2016年宮崎中央農業協同組合理事、2019年代表理事組合長、2023年会長理事。2023年6月宮崎県農業協同組合中央会代表理事会長を経て、2024年4月1日に新しく宮崎県農業協同組合がスタートした後、代表理事組合長を務める。

×

●インタビューとまとめ
三重大学　名誉教授
石田正昭



いしだ・まさあき
1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は農協論。元・日本協同組合学会会長。『家の光百年史』（家の光協会、2025年）を単独執筆したほか、『戦後農協史と『農業協同組合経営実務』』（全国共同出版、2025年）では刊行会代表を務めた。

＊前回の記事はコチラから





「希望と活力に満ちた」みやざきの農業と地域を創出します！（下）

宮崎県の農畜産物のブランド化は官民挙げて取り組まれている。同じようにＪＡ女性組織の活動も県域一体となって取り組まれている。そこには創設以来70年の伝統と、その伝統を受け継ぐＪＡ宮崎県女性組織協議会と地区本部（旧ＪＡ）女性部との足並みを揃えた活動がある。今回はこうした「組織の底力」を栗原組合長に語ってもらった。

ＪＡみやざきの原点――組合員の声を聴く

石田：貴兄は宮崎市田野町で施設きゅうりを栽培されていますが、10アール30トン採りを実現されているとお聞きしました。全国平均は15トン程度ですから、およそ2倍という高水準です。

栗原：かつて田野町では夏作に葉たばこ、冬作に干しだいこんという営農体系が広がっていました。そうしたなかで高所得農業をめざして施設園芸に取り組み、現在では施設きゅうりの一大産地となっています。きゅうりの収穫量では宮崎県は全国ナンバーワンです。

10アール30トン採りをめざして、周りの生産者たちも環境制御技術（二酸化炭素施用などによる）を導入して高収量栽培を実現するようになりました。ですが平均すると多分24～25トンかなと思います。

石田：何十年も前の話ですが、葉たばこの生産調査で田野町を訪れたことがあります。そのときに葉たばこと干しだいこんの組み合わせがこの地域の代表的な営農体系だと知りました。ただ葉たばこのあとの肥料設計がむずかしいと聞かされたことを覚えています。年によって土壌内の肥料残存成分に微妙な違いが生じるからだそうです。

栗原：葉たばこは干しだいこんと組み合わされて現在も栽培されています。廃作も進みましたが、所得の安定性が評価されて生産は継続しています。

ご承知かと思いますが、干しだいこん用に組まれる「大根やぐら」が特徴的な農村景観を形成しています。この大根やぐらをシンボルに「田野・清武地域 日本農業遺産」の認定を令和3（2021）年2月に受けました。夜空に



だいこんを寒風にさらして乾燥させる「大根やぐら」は冬の風物詩となっている

描き出される大根やぐらのライトアップが美しく、本地域の日本農業遺産推進協議会会長をわたしが仰せつかっています。

石田：葉たばこあっての干しだいこん、干しだいこんあっての葉たばこという関係ですね。これからも続いていってほしいです。

栗原：そのとおりです。

石田：組合員との距離がどうしても遠くなるというのが県一ＪＡの宿命かと思います。そうしたなかで貴兄は毎年、農家訪問を行っていて、農家との直接対話を続けておられますね。

栗原：はい。今年で３年目になりますが、最低１年に１回は各地区本部を回って対話を続けています。全部で１３地区本部がありますから、平均すると毎月１回、どこかの地区本部に出かけていることになります。

役員の方とはいろいろな会合でお会いする機会がありますが、そうでない方とはなかなかその機会に恵まれません。こうした状況は旧ＪＡ宮崎中央の時代も同じで、これではいけないと思って農家訪問を始めました。

旧ＪＡ宮崎中央の時代は支店の軽トラに乗って、指導員と一緒に半日とか一日かけて回っていました。現在もほぼ同じスタイルです。

石田：えっ、軽トラで回っているんですか？

栗原：「軽トラでいいよ」と言うんですが、実際は地区本部で車を用意してくれていますのでそうもいきません。行くだけで組合員さんからは「あっ、組合長が来てくれた」と言って喜んでいただけます。営農や暮らしの現状についていろいろなお話を聞かせてもらっています。

たとえば、園芸農家では高温障害や人手不足の話、酪農家では（一社）宮崎県酪農公社がなくなって育成牛の管理に困っている話などに加えて、その地区ならではの課題も聞かせてもらっています。こうした組合員さんとの率直な対話が県一ＪＡの運営に役立っています。



農家の圃場を訪ねて、営農の現状や課題について意見交換する場をたいせつにしている

▌女性組織はＪＡみやざきの宝

石田：どうでしょう。男性と女性を比べて、どちらのほうが厳しいご意見が多いでしょうか？

栗原：びしっと言われるのは女性のほうです。「農協は、もっとこうすべきだ」と率直に言っていただけます。

石田：年齢でいうと、どのくらいですか。

栗原：年齢層は幅広いですね。30代、40代の方から、60代以上の方まで、大きな違いはありません。厳しいというよりも、こうしてほしいという要望が多くなっています。たとえば、資材価格の高騰対策とか、選果場の改修を早く進めてほしいなどの話が印象に残っています。

石田：ＪＡみやざきの女性組織ですが、たいへん充実しています。ＪＡ宮崎県女性組織協議会の総会資料からもそのことは読みとれます。

栗原：そうですか。そこは自負できるところですが、残念ながら全体的な教育文化活動のレベルは低下しつつありますし、女性部員数も減っています。令和8（2026）年3月31日現在の女性部員数は8,257名ですが、10年前は13,612名でした。この10年間で5,355名、率にして39％も減少しています。

直近1年間では324名の加入者がありましたが、他方で885名の脱退者があって、差し引き561名の減少となっています。フレッシュミズの加入促進も働きかけていますが、お仕事があったり、子どもクラブの世話があったりなど、土日も平日も忙しいので、とても入る余裕はありませんという返答が多くなっているようです。



ＪＡ宮崎県女性組織協議会（写真中央・川上典子会長）は令和8年度宮崎県地域づくり顕彰「地域づくり大賞」を受賞

石田：部員の数はともかくとして、活動の質はとても高いように思います。新聞報道によれば、令和8（2026）年度の「宮崎県地域づくり顕彰」（平成8年度制定）でＪＡ宮崎県女性組織協議会（会長：川上典子）が「地域づくり大賞」を受賞されましたね。

栗原：この賞は地域振興に関してとくに功績のあった個人および団体を顕彰するというもので、これまでの30年間に大賞を受賞したのは13個人、9団体にすぎません。ＪＡ関係では3回受賞していますが、いずれも奨励賞でした（平成10年度の児湯農協新富支所洋蘭部会、平成16年度のＪＡ西都ハウスマンゴー部会、平成20年度のＪＡ西都女性部西米良地区）。

今回の受賞理由は、昭和31（1956）年の設立以来69年間という長い活動歴があること、組織が県内13地区、約8,800名を擁する大規模なものであること、宮崎県の食文化の継承や地域の魅力を再発見する発信を行っていること、高齢者への弁当配達や訪問活動、子ども向けの食農・食育活動、地元農畜産物を活用した料理教室の開催など、地域づくり活動が多彩なこと、ＪＡ女性大学を開催して

新しい仲間づくりや若い世代を取り込む工夫を重ねていることなどです。

受賞後の川上会長のコメントに「前向きに率先して地域を引っ張っていく一助でありたいと思うし、地域で『女性部に入っていると安心だよね』というような存在にならないといけないなと思っています」というのがありましたが、受賞団体の会長としてすばらしいコメントを残してくれました。



発足して70年を迎えた県女性協。地域住民を対象に食農教育や地域の暮らしを支える活動など、地域づくりに貢献する活動が評価された

『家の光』記事活用で女性部をパワーアップ

石田：家の光協会の担当者から「ＪＡ宮崎県女性組織協議会の家の光の記事活用作品をはじめとする料理手づくり作品コンクールが素晴らしい」とお聞きしています。これについてどうお感じになりますか。

栗原：高い評価をいただきありがとうございます。これには一つの前提があります。それはすべての地区本部で『家の光』全部員愛読運動が展開されていることです。運動の内容は各地区本部で異なりますが、大きくいうと、女性部活動のあらゆるシーンで『家の光』読書会が開かれており、記事活用の促進が図られていること、その一環として地区本部レベルで料理コンクールや手づくり作品コンクールが開かれ、交流が深められていること、交流の成果として女性部員の拡大や『家の光』新規購読者の獲得に結びつけていることなどの共通点があります。



ＪＡ女性部の学習会等では、読書会の時間を設けている

石田：すばらしい。『家の光』全部員愛読運動が記事活用作品展や料理手づくり作品展の盛況につながっているというわけですね。

栗原：そうです。令和７(2025)年度は、11地区本部で「ＪＡ家の光大会」が開かれ、そのうちの８地区本部で「お米・米粉料理および手づくり作品コンクール」が開催されました。

いっぽう本店レベルでは、令和７年12月３日にＪＡ宮崎県女性組織協議会主催の「第38回お米・米粉料理および手づくり作品コンクール」がＪＡ・ＡＺＭホールで開催され、230名の参加者がありました。このコンクールは同日開催

の「第70回宮崎県家の光大会」とは別建てです。

付け加えると、ＡＺＭホールは「アミューズメントゾーン宮崎」の略号で、ＪＡみやざき本店に隣接する市内屈指の集会施設です。一般への貸し出しも行っています。





料理コンクールや手づくりコンクールでは、『家の光』記事を活用した作品も多い

審査結果はつぎのとおりです（部門名、出品数、最優秀賞のみの掲載）。

① お米料理部門（出品数14点）「ハスガラ寿司」尾鈴女性部 農産加工部会

② 米粉料理部門（出品数12点）「あずきだんご」宮崎中央女性部 宝徳朝実

③ 手づくり作品 リメイク料理・非常食アレンジ料理部門（出品数21点）「ニラの万能塩だれ」西都女性部 濵砂知代

④ 手づくり作品 記事活用の部（出品数28点）「ポケットたっぷりカフェエプロン端切れで作れる鍋つかみ」こばやし女性部 高原支部部員

⑤ 手づくり作品 一般の部（出品数30点）「七五三の着物」こばやし女性部 小角由紀子

石田：すごいですね。38回目の開催でしたか。女性部の力の入れ方が伝わってきます。

それともう一点、お聞きしたいのは「ＪＡ女性部専門アドバイザー」についてです。昔は「オルグ活動」と呼ばれていたようですね。

栗原：そのとおりです。「オルグ」という表現は現代ではあまり使われていませんので「専門アドバイザー」という名称に改めました。

専門アドバイザーは「食や農、くらしに関する学習を深め実践活動を通じて、女性の声をＪＡ運動に反映させるために組織に参画する誇りと喜びを喚起する」という役割を担っています。

石田：平たく言うと、女性部活動により多くの参加・参画者を引き込むことを役割とする活動リーダーという意味ですね。

栗原：そうです。このアドバイザー制度も昭和48（1973）年に始まっていますので、50年以上の歴史があります。「オルグ」と名付けられたのも当時はそれで

十分通じたからでしょう。

専門アドバイザーは「食農教育活動専門アドバイザー」「生活活動専門アドバイザー」「広報活動専門アドバイザー」の３部門からなり、各専門アドバイザーはそれぞれの部門のグループリーダーとして仲間意識を高めるとともに地区本部の女性部長を補佐することとしています。任期はとくに定めていません。

石田：いわばこころ豊かな女性部活動の成否が彼女たちの肩にかかっているとい





年に一度、ＪＡ女性部専門アドバイザー学習会を実施し、知識習得や情報共有をはかっている

うわけですね。専門アドバイザーの選出は手上げですか、それとも声掛けですか。理想は手上げでしょうが、実際はむずかしいように思います。

栗原：そのとおりで、多くは声掛けになっているようです。

石田：それでも声を掛けたら応じる人がいる、というのはどこにでもある話ではありません。仲間意識の強さを感じます。

栗原：それと１年に１回ですが、本部レベルで「ＪＡ女性部専門アドバイザー学習会」を開いて相互研さんに努めています。全体学習会（共通研修）、農政学習会（講話および交流）、分科会（専門アドバイザー別）のほか、優良実績表彰や功労者表彰なども行っています。令和７年度はＪＡ・ＡＺＭホールに１３５名が集まりました。

石田：すばらしい。皆さん次代の役員候補者ですね。

栗原：来年度行われる広域本部への移行にあわせて女性組織も広域本部単位の体制づくりへの検討を始めています。あわせて「教育文化活動基本方針」の策定に向けて組織討議を進めていく予定です。

（取材／２０２６年７月１日）



取材に協力いただいたＪＡのみなさんと。前列左から西田和夫専務理事、栗原代表理事組合長、石田名誉教授、後列左からくらし組合員課・河野裕美課長、農政組織広報部・曽我部学部長

すげっちゃが、宮崎県の産地プロモーション！

宮崎県の官民挙げての農畜産業の振興には目を見張るものがある――これは今回の取材中に強く感じたことであった。以下ではそれに関する3つのエピソードを紹介したい。

第1は、好角家であれば知らぬ者はいないだろうが、大相撲の優勝力士に贈られる「宮崎県知事賞」の記念品が豪華なことである。宮崎牛1頭分と旬の野菜・果実1トンが贈られる。数ある記念品贈呈のなかで最も大きな盛り上がりを見せている表彰のようであるが、その寄贈者は「より良き宮崎牛づくり対策協議会」（事務局：ＪＡみやざき本店肥育牛課）である。その協議会は、宮崎県とＪＡおよび関係団体が資金を拠出していることから、土俵に上がっているのも県関係者とＪＡ関係者である。栗原俊朗組合長もすでに土俵に上がった経験があるが、場内のどよめきに足が震えたそうである。ちなみに宮崎牛は来年8月北海道で開かれる「全国和牛能力共進会（全共）」で5連覇をめざしていることでも知られる。



ＪＡ広報誌『エム・モーション』。農業者ルポの「キラリ農業人」や県産の農畜産物を使ったレシピ「ひなたのごちそう」などの企画がある

第2は、宮崎空港のボーディング

ブリッジ（搭乗橋）でＪＡみやざきの広報誌『エム・モーション（宮崎の風）』が配布されていることである。ボーディングブリッジの通路脇のスペースに10冊程度が置かれていた。おそらく「ＪＡみやざき、ひいては宮崎県の農畜産業のありのままの姿を全国の人たちに知ってほしい」というＪＡの思いがそうさせていると思った。わたしが搭乗したのは今年の7月1日だったので、最新の7月号が入手できたことになる。ちなみにＪＡの総代会資料によると、ＪＡみやざきは宮崎空港ビル（株）に1,800万円を出資している。恐るべしＪＡみやざきの底力である。

第3は、広報誌『エム・モーション』2025年7月号の「職員の秘密」という連載記事に掲載されているが、宮崎県職員の早日早貴（はやひさき）さんがＪＡみやざき総販戦略課みやざきブランド推進本部事務局に出向していることである。宮崎県に限らず、県職員がＪＡに出向している事例があることは寡聞にして知らなかった。出向先のブランド推進本部では「みやざきブランド推進方針」に基づき、関係部門と連携しながらみやざきブランド品目の振興に取り組んでいる。令和7年度には「日本のひなた宮崎県」を連想させる新たな認証マーク「みやざきブランドQuality」を製作・発表した。彼女はその事務局で小学生向けの食育活動や量販店フェア対応、情報誌作成などのプロモーション業務を担っている。



「職員の秘密」コーナーでは、ＪＡ職員のふだんの仕事ぶりがうかがえる（2025年7月号）